

現代韓国の風水説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 充彦 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2005612

Title	現代韓国の風水説
Author	野崎, 充彦
Citation	人文研究. 44 巻 1 号, p.1-25.
Issue Date	1992
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

現代韓国の風水説

野 崎 充 彦

一. はじめに

バルセロナオリンピックにおける韓国勢の活躍は記憶に新しいところであるが、なかでも圧巻は、森下選手とのデッドヒートの末に劇的な勝利をおさめた、男子マラソンの黄永祚選手であろう。1936年のベルリンオリンピックでは孫基禎（1912～ ）選手が優勝したものの、植民地統治下にあったため日章旗をつけて走らねばならず、ニュースを報じた東亜日報は孫選手の胸の日の丸を（恰も、1910年に石川啄木が地図上の朝鮮をくろぐろと塗りつぶしたように）消した写真を掲載し、朝鮮総督府によって無期停止処分を受けた。この、謂わゆる日章旗抹消事件は、いまだに韓国人の脳裏に鮮明に焼きついており、黄選手が優勝した瞬間、韓国人アナウンサーが「56年間の恨がいま晴れました」と叫んだというのも宣なるかな、なのである。

貧しい海女（あま）の子として生まれた黄選手は一夜にして民族的英雄となり、国家より与えられる終身年金は勿論のこと、国内の有名企業や資産家たちからも功労金の授与が相次いだのであるが、その中に一つ風変わりなものがあつた。黄選手の祖父が眠る墓所（江原道三陟郡）の地主が、マラソン優勝に気を良くし、墓所および周辺の林野百坪を寄贈したというのである。法務士（軍法会議の裁判官に任命された軍法務官）を努める千日星（53）氏が、「黄選手のお爺さんの墓所が明堂であつたからこそ金メダルをとれたのではないか。また、これからも黄選手が成長しようとするなら明堂の陰徳がより一層必要になると思い、この土地を寄贈することにした」というのである。（朝鮮日報 92.8.12）。

この明堂とは、本稿で取り上げる風水地理信仰にいう吉地を指すもののなのであるが、では、その風水とは何か？

二. 風水地理信仰について

風水地理信仰とは、極めて単純にいうならば、大地の中を流れる「気」(一種の生命エネルギー)の集まるところを明堂(吉地)とし、そこに生者や死者が住まうこと(前者は陽宅、後者は陰宅と呼ばれる)によって人間界の幸福を得ようとする、古代中国に発祥した民俗信仰である。

風水という用語は、晋の郭璞(276~324)の『葬経』に初めて見えるとされる。

経に曰く、気は風に乗ずれば散じ、水に界せらるれば止まる。古人はこれをして散ぜしめず、これを行かして止まること有らしむる。故にこれを風水という。風水の法は水を得るを上となし、風を蔵するを次とす。(1)

つまり、大地を流れる「気」の脈は通常、山の起伏に従って移動するのであるが(これを龍脈という)、河川などの地形に影響され、散ったり集まったりする。そこで、この「気」がうまく聚散する(蔵風得水)地をさがし求め、それを明堂として重んじるのである。明堂の典型的なものを挙げれば、図1のようなものになる。(2)(図1)



〔図1〕

そこに見られる風水用語の細々しい説明は省略するが(3)、要するに、中国の崑崙山から龍脈を通じて流れてくる「気」を河川のラインで一旦止め、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神に比定された山(あるいは丘陵)によって保つことのできる地を明堂と云い、そのような地に王城や住宅・墓地などを設

ければ福を得ることができるというのである。村落風景的に言えば、背後には高めの山が北風から村を守るように立ち、左右には穏やかな山や丘陵がうづくまるように村をつつんで前面には静かに彎曲する川が流れる、ちょうど「清江一曲 村を抱いて流る」（「江村」）と、杜甫が詠じたような情景を思いうかべればよいだろうか。一言で云うならば「背山臨水」ということになる（4）。

風水のもう一つの特徴は、その類物感應信仰である。風水においては、万物は「気」の所産なのであるから、物の形状はそれを形成する「気」の作用に従うとされる。逆に言えば、そこを流れる「気」がどのような属性を持っているかは、その物の形から判断できるのである。そこで、明堂と目される地の形状を見て、臥龍形とか鳳凰形とか、あるいは仙人舞袖形や將軍大坐形とかいったおめでたいネーミングが施され、それに関連する福を享受することのできる吉地として格付けがなされるのであるが、その種類は大変多く、バラエティに富む。

朝鮮においては、この風水信仰は遠く三国時代から流布していたとされ（5）、高麗・李朝時代には図讖（予言）と結びついて国政に深刻な影響を与えたことはよく知られている。平壤・開城・ソウルといった古の王城の地はすべて例外なく、風水説によって定められていたのである。このことは単なる伝説や言い伝えなどではなく、『高麗史』や『朝鮮王朝実録』といった国家の正史の膨大な量にのぼる王や臣下たちの風水論議の記述に確認できる事実であり（因みに、中国では正史における風水の記述はさほど多くはない）、また、歴代の王陵や有力な士大夫たちの墓所の殆ど全てが風水を考慮して造られた（6）ことから、その影響の深さ大きさが理解できるであろう。

冒頭にあげた黄選手の明堂墓地寄贈のエピソードも、このような朝鮮の風水の伝統上にあることは言うまでもない。本稿は現代に生きる様々な風水説の俯瞰を通じて、伝統的な風水説との異同や現代韓国における意義を考察しようとするものである。

三. 風水説の諸相

以下の章において、現代韓国における見られる風水説を取り上げていくのであるが、その前に、本稿の準備のために参照した主な資料を紹介しておく。

・『水脈と風水』 林応承 1986年 계성出版社

筆者はカトリックの神父。林神父の活動については後に詳しくふれる。

- ・『韓国明堂』 金虎年 1989年 東学社

韓国日報の記者が女性週刊誌に連載して反響を呼んだものを刊行したもの。村山智順の『朝鮮の風水』や前記の『水脈と風水』のほか、記者らしく「街の風水説」を丹念に取りあげている。

- ・『韓国風水思想史研究』 李夢日 1991年 日駟社

90年に慶北大学に提出された博士学位論文を出版したもの、著者は58年生まれの地理学者。風水の体系的な研究書としては84年に出た崔昌祚氏の『韓国の風水思想』に続くもの。巻末に付された119項目にのぼる風水師にたいする質問事項が興味深い。

- ・『新韓国の風水』 崔潏周 1992年 東学社

中央経済新聞に「新風水地理紀行」として連載されたもの。現役の風水師として活躍する柳鐘根氏（79年よりソウルで風水研究団体である理数学会を主催）に随行して全国を巡った記録。プロの風水師による詳細な風水解釈が売り物。

これらを見ても、現代韓国における風水への関心が生半可なものでないことが分かる。これらの他、筆者の講読する朝鮮日報に掲載された風水関連記事も適宜引用する。

（一）現代ソウルの風水

・ソウルの銀座と称される明洞にある明洞大聖堂は、騒がしい都心にあって典雅なゴシック模様の伽藍を誇る、韓国最大にして最も古い歴史を持つ（1898年完成）天主教の聖堂であるが、これには次のような話がある。この聖堂はもともと明堂の地にあったのであるが、近くに聖母病院が建設されたため、病院が明堂の地の首ねっこを押さえつける形となってしまった。その結果、天主教が財団であった京郷新聞が経営危機に陥って人手に渡ったり、大主教の更送などが生じたのであると。

・また、ソウル市北郊の北岳山のふもとにある大統領官邸である青瓦台は、あまりに奥まった地に位置するために、眼前を塞いでしまう形局となり、その結果、大統領をはじめとする政府高官たちは民心を洞察することができないのであると。

・漢江の中洲にあり、ソウルのマンハッタンともいえる汝矣島には、国会議事堂や韓国放送公社（KBS）、それに大規模な政治集会によく使用される汝矣島広場や高層マンション群が立ち並び、日暮れには悠々と流れる漢

江をはべらせながら夕日に染まってなかなかの壮観を呈するのであるが、この島はソウル市の中心から見ると、太陽や月の沈む西方に当たるため吉ならずという。尤も、汝牟(여의)を如意(여의)とが音通なのをかけ、何事も意のままになる所とみて、政治家にとってはむしろ吉とする見方もある⁽⁷⁾。

・韓国有数の国立大学として知られるソウル大学は、その激しい学生運動を嫌った朴正熙前大統領によって、75年にソウル市南郊の冠岳山の山裾に移転させられたといわれる。冠岳山はその峨峨たる山容から、古来より風水においては火の山(火星形)とされる悪山で、そのため市内の景福宮では火災が絶えず、それを鎮めるために水壺を山のあちこちに埋め、また水獣であるヘッテ(獅子に似た一角獣 善悪を判断する力を持つという想像上の動物)の像を景福宮の正門である光化門に置いて厭勝(魔除け)を図ったという有名な風水説話で知られる⁽⁸⁾。現在、全羅道の光州市にフランチャイズを持つプロ野球チームのヘッテ・タイガースのヘッテとはこの水獣のことであるが、あるいは80年の光州事件のような争乱が再発しないよう、密かに睨みをきかしているのかも知れない。

それはともかく、このような悪山のふもとに将来国家を担わんとする覇気に満ちた青年を集めることは決して好ましいことではないというのである。筆者自身も75年に移転直後のソウル大を訪ねたことがあるが、冬のはじめでもあり、西北の風の吹きすさぶキャンパスは荒涼としていて一層寒さが身に沁みたことをおぼえている⁽⁹⁾。

上にみた風水説に共通なことは、いずれも宗教界・政界などの社会状況に絡んだものであるということである。そこには韓国社会の現状に対する強い批判意識があるのだか、これはまた、古来より政治と係わることの多かった朝鮮風水の伝統でもあろう。それをより端的に示すのが、次にみる政治家に関する風水説である。

政治家にまつわる風水説には陰宅風水(墓所)に関するものが多い。つまり祖先の墓がこれこれだったので子孫にしかじかの結果をもたらしたというものである。

・尹潽善四代大統領(政権期間60.8~62.3)の先營(先祖の墓)は「瑞龍上天」形の明堂(忠清南道牙山郡所在)として知られているが、これには典型的ともいふべき風水説話が伝えられているので一瞥しておこう。

尹大統領の何代か前の尹某は議政府（李朝時代の最高政策決定期間）の要職を務めたほどの人物であったが、党争により落郷（都落ち）、片田舎で善政を施して人々の信望をあつめていた。尹は間もなく亡くなり、一家は没落したが、その子息はよく父の教えを守って暮らしていた。ある日、市場からの帰り道、路傍で病いに苦しむ乞食僧を助けて、しばらくの間世話をしてやった。やがて、元気になった乞食僧は別れの日にお礼として明堂の地の所在を教えた。それは、かの壬辰倭乱（秀吉の朝鮮侵略）のときの名将李舜臣將軍の墓所の裏手にあたる地であった。

旅の乞食僧をもてなし、返礼として明堂の地を授けられる型の説話は朝鮮に多い。車天輅（1556～1615）の『五山説林』巻五の李成桂が旅の僧（実は無学大師）から明堂を得る話の他、李朝後期の漢文説話集『青邱野談』巻一の「占吉地魚遊石函」⁽¹⁰⁾や舌きり雀の類話として知られる『興夫伝』をパンソリ化した『朴打令』など、同様のモチーフを持つものは多い⁽¹¹⁾。これらには、高麗の太祖王建が風水僧道詵から新しい王都の地を授けられたという、『高麗史』巻頭の有名な記述が影を落としていよう。

尹潽善はイギリスのエジンバラ大卒。上海で独立運動に参加、解放後朝鮮に帰ってソウル市長を経、60年の四月革命後に大統領に就任するものの、朴正熙らの軍事クーデタを許し、軍事独裁政権の長期化を招いた。79年の朴大統領暗殺事件後は全斗煥政権に協力的な姿勢をとり、一応安定した地位を占めている。波乱の多い韓国政治家の中では、その地位の高さを思えば、まずまず無難に切り抜けてきたほうであろう。上にみた、尹氏の明堂説話は、それも先營の余沢だということを語ろうとするものだろうか。

・朴正熙大統領を暗殺した金載圭中央情報部長の父親の墓は、「飛龍上天」形の明堂であった。このような飛禽類を名に持つ形局には、重量のある石材建築物などは避けねばならないのであるが、金載圭が情報部長に出世してから立派な墓石等を設けたため、それから僅か七日後にあの事件が起きたのである。

飛禽類型の明堂に石材類の施設を設けると不吉とするのはよく云われる。例えば、全斗煥十一代大統領の父母の墓は「鳳凰抱卵」形なので、墓の造成後、全大統領は一躍出世することができたのであるが、豪華な石築物を置いたために（鳳凰が卵の壊れるのを恐れるので）子孫は繁栄しないのだと⁽¹²⁾というのもその一つである。

以上、見てきた風水説の多く（いや、全てがというべきか）は、勿論、結

果論に過ぎない。これこれの因果によってしかじかの所応が生まれるというのが、風水説の基本構造である以上、それは当然の帰結であろう。重要なことは、それが結果論かどうかということではなく、風水説によって何が語られようとしているのかである。人心の赴くところ、また風水説も付き従うのであるから。

(二) 断脈説話の行方

韓国に留学経験のある人ならば、風水に関心があると否とに関わらず、一度や二度は必ず耳にするのがこの断脈説話である。断脈説話とはいかなるものか？

かの悪名高き朝鮮総督府が、植民地統治下にある朝鮮人民の反抗を恐れ、「將軍出陣形」だとか「飛龍昇天形」だとかいうような、民族の指導的人材が生まれそうな明堂の気脈を断つため、大きな鉄柱を地中深く打ち込んだり、わざと道路を付設したりして、風水的厭勝を図ったというものである。ソウルあたりで筆者がよく聞かされたのは、景福宮の前面を遮るように総督府の建物があるのは、仁旺山から流れ来る気脈を断つためだとか、南山に朝鮮神社を設けたのもソウルを威圧せんがためであるというものであった。

この断脈説話には原型がある。李朝時代の著名な士大夫である李重煥(1690～1765)の著に『沢里誌』という書物があるが、これは士大夫にとっての理想的な住居の地を求めるために書かれたもので、三十年にわたる李重煥自身の放浪生活と風水説が反映された異色の地理書である。この書の慶尚道篇の善山の所にこういう話が記されている。

善山は……もっとも清明穎秀、故に諺に曰く、朝鮮の人才半ばは嶺南にあり、嶺南の人才半ばは一善(善山)にありと。故に旧より文学の士多し。壬辰のとき、天將(中国の將軍)のここを過ぐるあり、術士、外国の多才なるを忌み、兵卒をして邑後の脈を断たしめ、熾炭もてこれに灸し、且つ大鉄柱を挿し往く。これより人才衰蕭して出でず。

一読して分かるように、先に述べた日帝下の断脈説話と殆ど同工異曲なのである。そこで私は、この種の断脈説話というのは『沢里誌』の焼き直しにすぎないと思っていた。ところが、総督府による断脈行為を証明する物証が発見されたというのである。

85年3月25日に或る山岳会が、ソウル近郊の北漢山白雲台の頂上から、日帝が打ち込んだという長さ40cm 径25cmの鉄柱22本を見つけ出した。はじめ、

この鉄柱について、測量のための三角点標示であるとか、単なる方位標示であるとかいう説も唱えられたが、いずれも不規則に打ち込まれた鉄柱の説明には適せずとして退けられた。しかも、植民地時代に鉄柱を打ち込む日本人たちを見たという、80才の老婆や、1943年に開城（高麗の都、風水の大吉地として知られる）の松岳に鉄柱を打つ作業に、警官として従事したことがあるという元警官二人の「証人」まで現れ、日帝断脈説は殆ど確定的なものとされるに至ったのである⁽¹³⁾。

このことを知って、私は断脈説話に似たもう一つの話を出した。昨年（91年）の12月に台湾を訪れ、現地の著名な風水師である陳啓銓氏にこちらに案内してもらいながら話を聞く機会に恵まれたのであるが、台湾南端の恒春や満州方面に行ったとき、日本による植民地時代、日本軍と原住民が武力衝突した牡丹社事件があり、鎮圧後、日本人が原住民を鎮撫するために建てたという白虎鞭と俗称される塔を見た。この塔はまぎれもない風水塔で、気脈を抑えて台湾人の氣勢を殺ぐのが目的であるというのが、陳氏の説明であった⁽¹⁴⁾。

鉄柱と風水塔、手段は異なるが、どちらもその目的は同じである。これらについてどのように考えればよいだろうか？ 一つは、何らかの事実を反映したもので、植民地統治政策として目的意識的かつ組織的に行われたとする見方。もう一つは、日本帝国主義に対する反日感情の産み出した共同幻想とする見方なのであるが、今のところ、どちらか一方に軍配を挙げるには、些か資料不足の感が否めないように思われる。より広範囲な地域における類似例や裏づけを収集する必要があるだろう。その上で改めて論じることにした。

気脈を抑えつける話として、一つ付け加えておく。全羅北道南原郡山内面にある、実相寺の薬師殿に安置されている鉄製如来像（宝物41号）は、台座の上でなく、地面の上に直接置かれているが、それはこの地から日本に向かって流れ出ている気脈を抑えつけ、日本の降盛を妨げんとするためであるという⁽¹⁵⁾。崑崙山に発した気脈が、朝鮮では白頭山から智異山や済州島の漢拏山に連なり、そこから海を渡って琉球にまで到達するというのは、先ほどの『択里誌』山水の条にある説ではあるが、琉球ではなく日本本土に朝鮮からの気脈が通じているという主張は、李朝時代の資料には見られないようである。実相寺の日本への気脈云々の話は、比較的新しい時代に産み出されたものであろう。

(三) 神父の風水

ダウジングと呼ばれる水脈探知の方法がある。東京都の水道局で実際に使われているという話をどこかで聞いたことがあるが、針金のような棒の二又に分かれた方を持ち、地面の上を静かに移動すれば、地下で水道管が破裂している場所に当たると、棒が微妙に反応し、水漏れの箇所を発見できるのだそうである。眉唾のような話ではあるが、科学的な根拠もあるという。というのは地球の重力はどこでも一定というわけではなく、地質によってかなり変化するらしく、例えば、地球を周回する人工衛星も常に同じ高さを飛んでいるのではなく、山岳地帯を飛ぶときと大洋上を飛ぶときとではその高度が異なるという。とすれば、人工衛星は地球をダウジングしながら飛んでいるとも言えようか。角や触角を持つ動物や昆虫が水のありかを知ることができるのも、同じ理屈だそうである。

ここに紹介する林応承神父は、我々がいうところのこのダウジングを行うのである。まず、林神父の経歴を見ておこう。

林神父は1923年、今は北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に属する黄海道の生まれ。1937年頃、通っていた神学校の朝鮮人神父が懐中時計で水脈を探し出すのを目のあたりにしたのがきっかけで、自分でも始めるようになったという。因みに、この朝鮮人神父は懐中時計を垂らして水脈を求める方法をフランス人神父から学んだという。西洋では、先ほどから述べているダウジングはかなり古くから知られているようで、岩を打ちつけて水を出したモーゼの杖もこの類だとされ（弘法大師空海にも類話あり）、中世以来、数多くの文献に記録され、ゲーテの『ファウスト』第二部にも見えるもので、ベトナム戦争では地雷探知にも活用されたという⁽¹⁶⁾。フランス人神父が伝えたというのも、おそらくその流れを汲むものであろう。

以後、林神父は自分なりの方法を工夫し（神父自身は糸に垂らしたおもりを使用している）、水脈探しに励み、噂を伝え聞いて水脈探しを頼みに来た人々のために、厭うことなく出かけては「神秘のおもり」を垂らして歩くようになった。1978年の干魃の際には、農業用水のために二百二十箇所余りの水脈を探し出したという⁽¹⁷⁾。その他、聖堂のための地下水は勿論、江華島の伝燈寺のような仏寺や慶州国立博物館、それに建国大・徳成女子大・檀国大・カトリック大といった大学や馬山や釜山の工業団地といった様々な施設のために水脈探しを実行してきている。なかでも印象深いのは、北朝鮮との国境付近の前線に駐屯する陸軍8276隊のため、1979年に行った高地における

水脈探しである。通常、水は低きに流れるものであるから、低地で水脈を探すのならば理解できないこともないが、この場合のように山上で、しかも堅い岩盤の下を流れる水脈を見つけ出したというのだから何とも不思議なことである⁽¹⁸⁾。

以上のことから、林神父は単なる布教のための手段として水脈探しを行っているわけではなく、むしろ「富国強兵」政策に積極的に参与しているようにも見えるが、その裡にはクリスチャンとしての熱烈な信仰心があることは云うまでもない。そのことは彼の水脈観からも伺える。林神父によれば、太初、神が混沌のさなか大地を造って蒼空を設け、それによって隔てられた天空中の水（水蒸気）や地下水も、本来一つの神によって祝福された水と見做す、このこと自体が取りも直さず信仰の告白でもあるというのである。また、韓国は五穀百果を生みだす無尽蔵な水脈に恵まれた国であり、他のどの国よりも天賦の宝庫である神に祝福された国だともいう。正に、コーリアン・カトリックの面白躍如といったところであろう。

林応承神父の水脈探しのもう一つの特徴は、それを人体に応用したことである。林神父によれば、地下水には乾水（地下に沁みこんでは乾いてしまう水）と生水（地下深く入り、真の水脈を形成する水）とがあり、生水には常に水の供給を受けようとする強烈な自己運動力があるため、水脈の上に位置するものに対して破壊作用を及ぼすというのである。そのため、水脈の存在を知らないまま、その上に住居したりすると原因不明の病いに苦しむことになるという、林神父の著『水脈と風水』（第三部 水脈と保健）には、そのような実例が数多く挙げられているが、繁雑なのでここでは割愛することにする。やがて、神父は人の身体を大地に見立て、水脈を探す要領で人体の病める部位を診断できるようになるのであるが、そこに登場するのが風水なのである。

教会で信者の様々な悩みに触れるうちに、林神父は祖先を祭る墓所の状態と密接な関わりがあることに気付き、ついには陰宅風水の世界へと踏み込んでいくことになる。本稿の冒頭で述べたように、風水には陽宅（生者の住まい＝住居）と陰宅（死者の住まい＝墓）があるが、後者の場合、そこに葬られた祖先の亡骸（骨）の状態が特に重視される。というのは、陰宅風水の場合、流れてきた龍脈の「気」はこの祖先の遺骨を通じて子孫に影響を及ぼすとされるからである。これを「同気感應」と風水では呼ぶ。朝鮮においては、墓所の位置は南向きの日当りのよい岡の上と、およそ相場が決まっているが、

水捌けのよい地なら、祖先の亡骸は順調に美しい骨となり、子孫に幸福をもたらすと信じられているからである。中国では、墓所予定地の地質を見るために、予め豚の骨を埋めてその変わり具合を調べもしたと伝えられる⁽¹⁹⁾。従って、埋葬後、棺の中の遺体に樹木の根が絡みついたり、水に浸かっていたり、甚だしくは蛇の巣になっていたりというような不手際をすれば、子孫には直ちに恐るべき災厄が降りかかるとされ、このような事態は何としても避けねばならない。中国や李朝時代の士大夫の冠婚葬祭の典據として尊重された『朱子家礼』の聞喪・奔喪・治喪の条には程子らの説を引いて、事細かな注意事項がある。林神父の墓地風水への傾斜は、無論、このような歴史的文化的背景の上にあるものではあるが、それにしてもクリスチャンは祭祀(伝統的な儒教式の祖先崇拜儀礼)にも参加しない人も珍しくないほど、宗教的厳格性のある韓国で、林神父のような活動が教会組織内でどのような目で見られているのか、気になるところではある。

ともかく、林神父は「経験的に」風水は信ずべきものと主張し、火葬を激しく非難する。火葬は、このうえもない祖先に対する暴挙であり、インドはそれゆえに貧しく、日本はそれゆえに原爆の災禍を招いたのであるともいう。原爆云々のくだりは「世界で唯一の被爆国」(唯一の民族ではない)の民ならずとも、些か首肯しがたいものがあるが、林神父はそう主張してやまないのである。

(四) 建築家 朴時翼氏の明堂実験

今まで見てきた現代韓国の風水の例は、「不合理ゆえに我信ず」といった感が強く、どうも批判精神に乏しいのではないかと思われたかもしれない。実のところ、風水は韓国でも屢々多方面からの批判を浴びている。風水批判は、古くは高麗や李朝初期の遷都問題をめぐる議論の中でもあったし、李朝中期以降には士大夫たちの墓地獲得のための度を越えた山林の占有によって耕作地が侵害されたり、山訴とよばれる墓地に関する訴訟が頻発するに至ったため、実学者たちの風水批判が起きてもいる⁽²⁰⁾。翻って現代でも似た状況が発生しており、墓地の国土に占める割合は1%にも及び、毎年汝矣島の1.5倍にあたる土地が墓地に変わっているという⁽²¹⁾。これに対し、政府は火葬を奨励したり、基当面積100坪以上の石築物で過度に装飾した墓を「豪華墓」として問題視したりしているが、実効性には乏しいようだ。

さて、ここで紹介する朴時翼氏は風水への建築学的批判から出発して、遂

には風水の虜になってしまった例である。

朴時翼氏の風水との出会いは、建築士として設計事務所に勤務していた時に始まる。漢陽大の建築工学科を卒業後、設計事務所に就職、住宅の建設などを手掛けていた。ある日のこと、くどいほど事細かな設計変更を求める施主が、実は風水を盲信していることを知って反発。風水説を論破せんがために猛然と風水の勉強を始めた。『周易』など、東洋哲学と風水説との関わりからはじまり、風水師に随行して行った、三年間にわたる現地調査に基づいた風水理論の分析、および現代建築理論への適用方法の研究にと進み、遂にはその成果を「風水地理説発生背景に関する分析研究 建築への合理的適用のために」と題する博士論文（1987年 高麗大学大学院）にまとめるに至ったのである。

風水否定のために研究を始めた朴時翼氏ではあったが、次第に風水を肯定的に見るようになり、今度は逆に「科学的に」風水説を証明せんと、殺人事件など新聞マスコミに紹介された凶悪事件の現場や関連する場所を自ら訪れ、事件発生 of 風水的要因の分析に努めるようになった。建築士らしく、家の構造や敷地の方向など、これこれが風水から見て凶のために事件が起きたとするもので、端から見ればどう考えても結果論のこじつけに過ぎないように思えるのではあるが、本人は至って大真面目で、事件当事者の居宅にあがって馬鹿正直にも「風水を検分に来た」と告げては蹴りだされたりしている。

かくの如き風水修行を続けるなか、朴時翼氏は明堂実験なるものを思いついた。1979年、師と仰ぐ風水師が明堂の地であると太鼓判をおした、多くの王陵や墓のあることで知られる京畿道金谷面の某山地三千坪を購入。陰宅と陽宅は基本的には同じだとし、名穴（明堂の中心地）に住めば必ずや何らかの良き変化が起きるだろうと期待、穴ぐら生活を開始したのである。先に陰宅風水について述べた際、埋葬された祖先の骨を通じて明堂に流れ来た気の福を子孫が享受できるとする「同気感應」という考え方があるといったが、朴時翼氏のこの明堂実験は、謂うなれば、自分の生ける骨を明堂内において福の享受を求める「直接的同気感應」を狙ったと云えようか。

当時、朴時翼氏は、36才。職場での仕事をおえると、自宅で装備を揃えるや一目散に「明堂」に駆けつけ、一夜を過ごしては翌朝また職場に向かうという日々が続いた。途中、穴ぐらに置いていた寝具やラジオが盗難にあうといった災難にも見舞われたが、挫折することなく実験は続けられた。ある日の朝、「お前は完全に包囲されている。手を挙げて出て来い」と怒鳴るスピー

カーの聲に目覚めるや、直ちに警察に連行されてしまった。北朝鮮から侵入したスパイと間違われたのである。何かと誤解は解けたものの、明堂実験はこの一件で頓挫してしまい、その後、この「明堂」の地は或る政治家に墓所として譲られることになった。「明堂」のお蔭か、その政治家は度重なる政変にも失脚することなく、政治活動を続けているとのこと。結局、風水地理の「事実性」を実証しようとする試みは成功せず、発生背景の説明にのみに停まってしまったことを朴時翼氏は残念がっているという⁽²²⁾。

この明堂実験の顛末は、朴時翼氏の個人的奮闘というイメージのせい、残念ながらスラップスチックな印象しか与えないようであるが、規模が大きくなるにつれ、事は俄かに真実味を増してくる。次節では、そのような例を見てみよう。

(五) 双子村・国立墓地 その他の風水建築物

・双子村

全羅道麗川郡の某村は75軒中35軒に38組の双子が生まれたという、世界でも稀に見る双子多産の村として知られている。その秘密を解明せんと、カトリック大の研究チームが調査を行った。まず初めに、飲み水が関係しているのではないかと考えられたが、同一の井戸を使用する付近の村には、双子村のような現象は全くないため、飲料水原因説は退けられた。次に、遺伝のような先天性の要因があるのではないかと推定、近隣の村落に住む血縁者の追跡調査を行ったところ、一組の双子も見いだすことができず、これも否定された。そこで登場したのが、かの風水説である。

そもそも、この村に双子が生まれ始めたのは百二十年ほど前からだそうで、以来、「生まれたといえば双子」と言われるほど、双子の出産が相次いだ。ところで、村には一つの伝説があった。それは、村の東方に見える双胎山（または双峰山）のもたらす精気のため、この村に多くの双子が生まれるようになったというものである。そこで、崔昌祚教授（当時 全北大地理学科）は風水の形局論から説明できるはずだと、現地調査を開始した。その結果、この村は風水地理の定穴法（名穴の位置を決める方法）によって村の位置が定められており、75軒の家の方向を坐向論（方位に関する術法）によって分析してみると、その内の35軒すなわち双子を出産した家庭は全て台所の坐向が一定であり、洗濯場所やゴミ箱の位置など、主婦たちが家事のために働く場所の方位が一致していることが判明したという。つまり、同一の方向から

同一の「気」を受けたために同一の結果がもたらされたというのである⁽²⁵⁾。

ともあれ、この双子村は風水の力を実証する格好の例としての地位を占めるようになり、昨今の韓国における風水ブームに乗って、TV番組でも取り上げられ(90年11月26日KBS)、新たな話題を呼んでいる。

・国立墓地

現代韓国における陰宅風水立地の最も代表的な例である。朝鮮戦争直後に国家的事業として国立墓地の選定が行われ、牛耳洞や徳沼など、いくつかの候補地が挙げられるなか、その年(1953年)の十月一日に、著名な風水師である池昌龍氏によって漢江南岸に接する丘陵地帯の銅雀洞に決定された。その詳細な風水判断はここでは略するが⁽²⁶⁾、要するにその全体的形局は、冠岳山を主山(明堂の中心地である穴の背後に聳える山、鎮山ともいう)とする孔雀張翼形(これとは別に、將軍大坐形とする形局判断もある)だという。また、国立墓地に葬られる著名な人物たちの墓所はそれぞれ別個の形局を持つ。例えば、初代大統領李承晩(1875~1965)の墓は靈龜飲水形、74年8月の在日韓国人青年文世光による朴正熙狙撃事件で亡くなった大統領夫人陸英修女史の眠る墓は孔雀抱卵形というように。これらの他、金鶴烈前副総理や金鐘五大将の墓など、多くの墓所が池昌龍氏の手によって定められている。

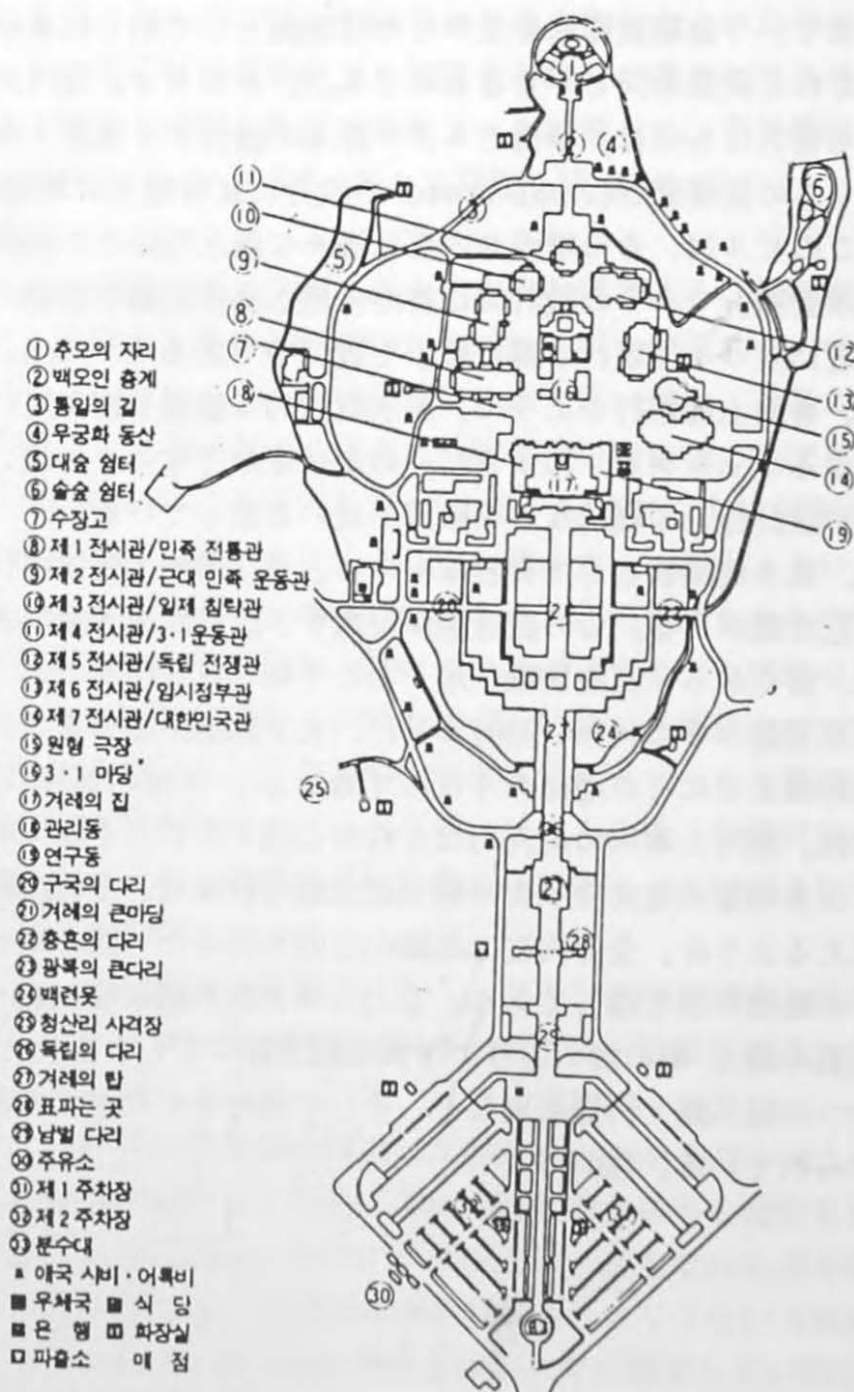
・その他の風水建築物

墓地のような死者の住まう陰宅ではなく、生きた人の利用する陽宅の現代的例を見てみよう。まず、忠清北道清州市の市庁舎(1967年設立)があげられる。

もともと、この清州の地は風水的には「行舟形」とされていた⁽²⁷⁾。行舟形とはその土地全体の姿が水上を流れる舟の如き趣きのある地形をいい、平壌がその代表的なものである。このような地では、舟上での生活を模したタブーが設けられた。例えば、平壌では井戸を掘ってはならない(水が侵入して沈没するから)⁽²⁸⁾とか、舟が流れ過ぎるばかりでは繁栄しないので大同江河畔の練光亭のもとに錨を沈めたとかいうものである。大正12年にこの碇を探しだし、引き上げたところ、未曾有の大洪水にみまわれたという話が伝えられている⁽²⁹⁾。また、安東や羅州のように、邑の形が行舟形だから安定のためには櫓(マスト)が必要だということで鉄や石の柱を建てた所もある⁽³⁰⁾。これらを見ても分かるように、朝鮮には行舟形に見立てられる地が多いのであるが、清州市の市庁舎の場合は、建物そのものの形を行舟形にしまったのである。日本の建築家毛綱毅曠氏の設計による釧路市立博物

館は、風水でいう金鶏展翅形を生かした建築物として知られるが、清州市の市庁舎もこれと発想を同じくするものである。ところで、現代の風水建築物として最も有名なものは、華僑とユダヤ資本の経営する香港上海ビルであろう。イギリスの建築家 Norman Foster の設計による地上47階地下4階の超近代的なこのビルは、その壁面や内部に様々な風水呪術的な装置を備えた一種の「風水要塞」で、その設計には香港の風水師古柏齡の意見が反映されており、付近に立つ中国銀行と風水戦争を展開中であるという⁽²⁹⁾。清州市の市庁舎が、香港上海銀行のように、風水呪術的な装置を備えているのか、或るいは単なるファッションにすぎないのかは定かでない。一度、直接訪れ、立地決定や設計施工の経緯などを確認したいと思っている。

その他、風水建築物として有名なものに、全斗煥前大統領の肝煎りで造られた独立記念館がある。この記念館が位置する忠清南道天原郡木川面黒城山の一带は、古くから「五龍争珠之地」として知られる明堂であった。即ち、高麗の太祖王建がその13年(930)8月に、天下統治の願いをこめて設置した天安都督府はまさにこの地にあったのである⁽³⁰⁾。黒城山を主山とし、案山は頭を垂れ、並川と木川の両河川は左右から抱くがごとく流れ来て合流する、紛うことなき明堂の地に立つこの独立記念館の特徴は、その建物配置にある。図2に見えるように、全体的には黒城山に頭を向けた一匹の亀と魚のエイという二つの動物の姿を模してあり、主山につき出た露積峰(亀の先端部分)には「追慕の塔」、亀の胸の辺りには独立記念館の中心ともいえる「同胞の家」や七つの展示館・円形劇場など、そして菱形をしたエイの部分には駐車場が建てられている。(図2)



[図 2]

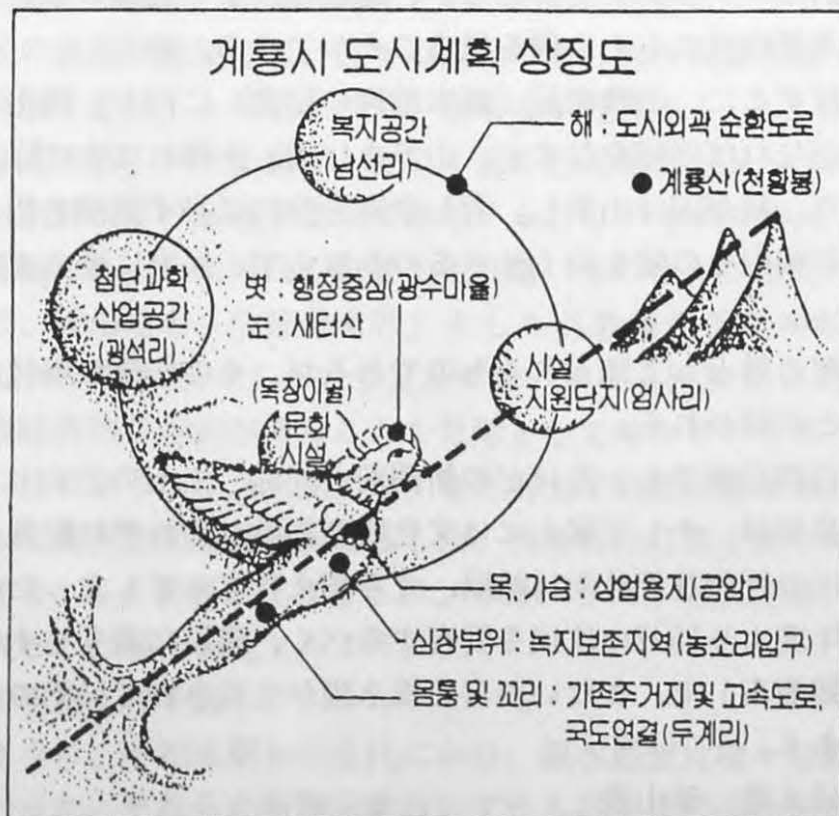
最近では、ソウルオリンピックの選手村がやはり風水の左青龍・右白虎を意識した建造物として知られる。選手村はオリンピックの後、一般向けのマンションとして売り出されたそうだが、そのネームヴァリュウのみならず、風水上の吉地としても人気を呼んだことであろう。

以上、見てきたのは村落や墓地・建物における風水であったが、今度はそれが更に大規模になった例、すなわち現代都市計画における風水を見てみよう。

三. 新しい風水

・「鷄龍市」風水都市計画

郡部移転によって急増した人口を受容するために、都市計画に着手していた忠清南道は、1990年八月に都市計画案を確定したのであるが、その案には風水地理思想が大胆に取り入れられており、一躍話題を集めた。朝鮮日報の報じるところによれば(1990.8.5)、問題の新都市とは、忠清南道論山郡の新都安一帯に予定されている鷄龍市(仮称)である。その計画によれば、新都市全体を一羽の金鶏が鷄龍山の主山である天皇山に向かって飛ぶ金鶏飛翔形とみなし、金鶏の胴や尾にあたる所には既存の住居地や高速道路を、心臓の部位は毀損を避けるために公園などの緑地にし、首や胸は産業用地に、目には文化施設を、そして金鶏のとさかの部分は行政中心地にと、それぞれ決定したというのである。(図3)



[図 3]

計画決定においては、風水師や風水に一家言をもつ住民の意見が反映された。開発担当官の韓基善氏（35）によれば、「一次基本計画を立てたのち、昨年4月から風水家と地域住民の意見を聞いたが、不思議なことに当初の構想と殆ど一致し、風水説を取り入れるのに何の困難も無かった。むしろ、時には風水説の助けを借りて最終決定を下したこともあった」そうである。

実は、この風水的新都市計画はこれが初めてではなく、以前に発表された大田市の行政首都建設計画のなかにも類似の計画があった（場所的にも重なる）。その計画書では、「韓国的都市の素地として、本計画では、風水地理説に由来する我が国特有の都邑立地伝統を、都市の基本構造へ受容する。……いわゆる風水地理説は、迷信に近い固陋なものではなく、現代において脚光を浴びている環境適応概念に相応するものである」と高らかに宣言、風水を正面切って肯定している⁽³¹⁾。また、「人間は建物を建てる時、一般的生活の必要に応じて建てるが、この建物は地上に新たな一個の‘陽’を形成するのである。新たな建物による陰陽の変化により、建物外部の自然の中に新しい運動が起きる」とも言っている。「静」としての地理に「動」としての龍脈を絡めることによって生命エネルギーの活性化を求めるとするのは、風水地理説の基本的なコンセプトではあるが、建造物による陰陽の変化という考え方は、遠く高麗時代にもその例を見ることができる。即ち

謹んで按ずるに、道説密記（風水地理の秘書）に曰く、稀山なれば高楼をなし、多山なれば平屋をなすと。山多きは陽、山稀れなるは陰、高楼は陽、平屋は陰なり。我が国は山多し。若し高屋を作れば必ず衰損を招く。故に太祖以来、唯だ闕内その屋を高くせざるのみならず、民家に至るまで悉く皆これを禁ずと⁽³²⁾。

謂わゆる高屋の禁として知られるものであるが、その伝統が現代にも生き続けていることが伺われる。

この行政首都計画でも、先ほどの新都安と同様、主山の方に行政区を、南部には産業地域、そして案山には文化娯楽施設がそれぞれ配置されていたらしい。大田の行政首都計画は結局、立ち消えになってしまったが、新都安のほうは91年度より15万の住民を受容するべく、建設に着手されるという。建設後の「鷄龍市」で、またいかなる風水説が生成されていくのか、興味深いところである。

・白鯨の帰る港 釜山港

呉建煥教授（釜山大学）は、港都釜山の地勢を陸地からではなく海から見

れば、風水地理上、九徳嶺の高遠見山は主山、牛岩半島は左青龍、松島半島は右白虎であり、釜山港の入口に位置する影島は、いわゆる歓喜をもたらす案山として、その断面が恰も鯨の姿に似る。それ故、釜山は白鯨帰浦形の、海洋時代最高の明堂であると前提し、21世紀の太平洋時代を迎え、釜山の都市空間にこのような象徴性を付与することが必要であると主張した⁽³³⁾。

風水の形局名に突然、鯨が出てくるのは、少し奇異に映る。確かに、日常語のなかには大酒飲みのことを「酒鯨」(술고래)と呼んだり、立派な邸宅を「鯨の背のような瓦葺きの家」(고래등같은 기와집)というような表現があるし、70年代には「鯨取り」(고래 사냥)という、実力派歌手の孫張植が歌ってヒットし、今では青春歌謡の定番となっている歌もあり、木浦や釜山のような沿海地方では鯨肉を食べもする所から、鯨に対する文化的親近感はあろう。しかし、この「白鯨帰浦」の形局というのは朝鮮の伝統的な風水解釈にはない形局判断であると思われる。

風水地理理想は古代中国に発し、「葬経」や「青鳥経」「人子須知」「雪心賦」といった古典的風水経典をテキストに形局判断をくだすため、その形局名には「金鶏抱卵形」とか「仙人舞袖形」「臥牛形」というように、共通なものが多いが、やはり、地域的特性といったものがあるようである。例えば、香港新界区の漢族の族譜には、代々の祖先の墓の風水判断が記されており、そこには「獅子滾毬」と命名されているものが見えるし⁽³⁴⁾、台湾の新竹県には「猪肝吊胆形」や「蝙蝠形」という名の形局名が見えるが⁽³⁵⁾、それらはいずれも朝鮮における風水判断では用いられないものである⁽³⁶⁾。風水の形局名も地域やあるいは時代の影響を免れ難いものなのかも知れない。

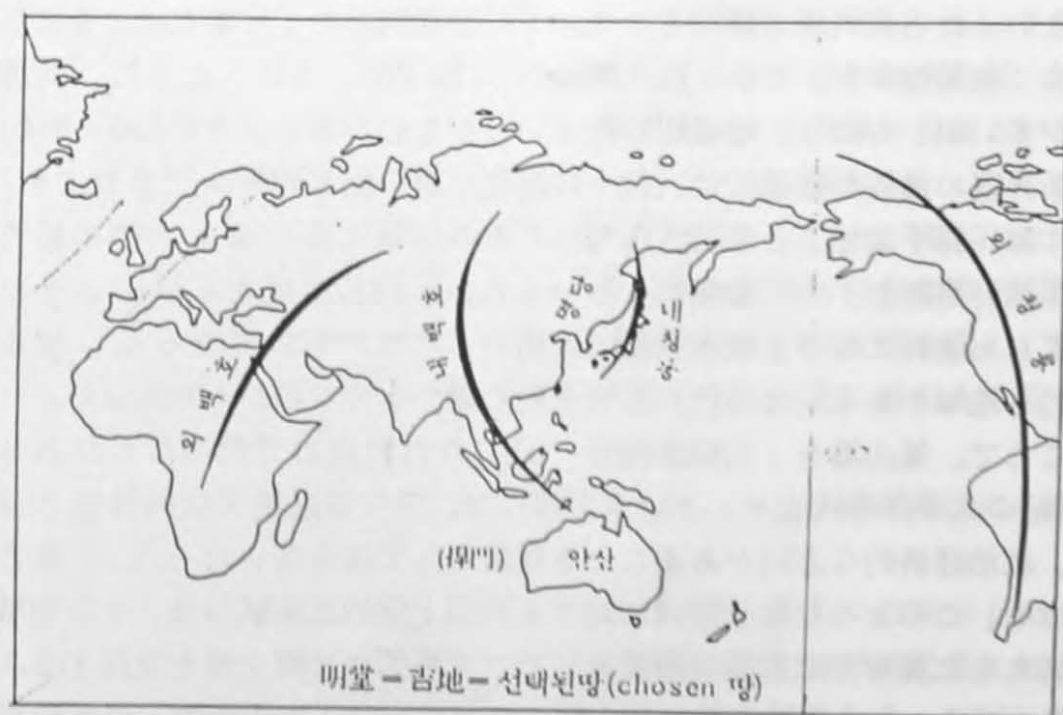
ところで、釜山港を「白鯨帰浦形」とした呉教授の言葉のなかにあった「21世紀の太平洋時代云々」という文言には、単なる民族文化的特性とは異なる、政治経済的な志向があることを見落としてならないだろう。「筆者の見解でも、このような生活空間に対する形而上学的意味賦与は、その地域の居住者たちに実存空間意識を函養せしめ、究極的には郷土愛を発揮するように働きかける」⁽³⁷⁾と李夢日氏は言うが、では、その「生活空間」が朝鮮半島全体に拡大された場合を見てみよう。

・世界の明堂 韓半島

周知のように、李朝末期から近代にかけ、風水思想は様々な新興宗教に吸収されていった。それらの新興宗教はいずれも各々の団体の総本部のあるところを世界の中心と見做す傾向があるが、それらの代表的なものの一つであ

る甌山教の場合、それは母岳山（全羅北道金堤郡所在、ソウル近郊の母岳山ではない）であった。韓国新興宗教の特性の一つにその「択地思想」が挙げられる⁽³⁸⁾ 末世的な世に出現する救世主を迎え、新たな王国が建設される「約束の地」があるとするもので、それには風水思想の影響が大きいことは云うまでもない。

このような韓国の新興宗教における、総本山を世界の中心と見做す考え方と風水思想の総合の結果、韓半島（朝鮮半島のこと 韓国ではこの呼称を用いている）全体を世界の明堂とする「世界の明堂 韓半島」説が生まれるのも至極当然のことかも知れない。図4は現代韓国の甌山教信徒金漢国氏が描いたものであるが、朝鮮半島を中心（明堂）にし、日本を内青龍、中国およびインドネシア半島を内白虎、南北アメリカ大陸を外青龍、西アジアおよびアフリカ大陸を外白虎、そしてオーストラリアを案山に比定するという、壮大きわまりないものである。（図4）



世界の明堂 韓半島

〔図4〕

本稿でもしばしば引用してきた『択里誌』の山水の条には
古人我が国を謂いて老人形となす。亥に生じて巳に向かい、西に向かい

て開面す。中国に拱揖するの状あり。故に昔より中国に忠順たり。且つ千里の水、百里の野なし。故に巨人を正せず……

と、至って事大主義的で控えめなのを見れば、その間の民族意識の激変ぶりが分かるというものだ。このような拡大志向が生まれる地盤には、韓国の多くの新興宗教が共通に持つ後天開闢思想があると思われる。後天開闢思想とは何か？ 端的に言うならば、一種のメシア思想で、新しい教えによって開闢した後天の世には、全ての人間が聖なる存在となる地上天国が到来するというものである。19世紀の半ば頃、崔濟愚によって農民の間に急速に広められた東学がその代表的なものであるが、この後天開闢思想も、李王朝の終末と鄭氏による新王朝の勃興を予言した風水的図識の書『鄭鑑録』が多大な影響を与えていると言われる。大統領選を目前に控えた韓国で、国民党の鄭周永氏をこの『鄭鑑録』とかけて取り沙汰するのをみても、その影響の根強さが知れよう。

以上のような主張が生まれる背景には、日本をはじめとする帝国主義列強の侵略や植民地からの解放も束の間、朝鮮戦争のあとの南北分断というような社会状況があったことは言うまでもない。聞くところによれば、近頃、マスコミを賑わしている統一教会には、やがて韓国が世界の中心となり、韓国語が世界の公用語になるという主張があるそうだが、朝鮮の新興宗教の伝統から言えば、極く正統的な主張なのかもしれない。

釜山白鯨帰浦説といい、世界の明堂 韓半島説といい、強烈な民族意識に彩られていることは容易に見てとれよう。そして、それは次のような風水説をも生むのである。

・統一朝鮮の新首都案

或る意味で、韓国人にとって風水地理理想とはどれ程の重みを持つのかを、最もよく示す人物が崔昌祚教授(44)である。崔教授といえば、1984年に出版された『韓国の風水思想』で、地理学的方法によって朝鮮の風水研究に新たな時代を招来し、90年にも現代韓国の風水を具体的に検討した書『良い地とは何処を云うのか』を出したことで知られる、気鋭の地理学者であった。「あった」と過去形で云うのは、今年はじめ、この崔教授が「最近、研究能力に限界を感じるようになり、地理調査を通じて、大地の気と脈を探る力を補充するために」、ソウル大学に辞表を提出してしまったからである⁽³⁸⁾。こういう研究態度を、ひょっとして「ポストモダン」と呼ぶのかどうかは知らないが、私などには目から鱗が落ちるほど衝撃的で、朝鮮における風水思想

の浸透ぶりを改めて教えられた思いがした次第である。

それはともかく、この崔教授が南北朝鮮が統一した場合、新たな首都にはどの地が良いのかを風水地理的に検討した結果を発表している。「風水思想から見た統一韓半島の首都立地選定」(1989. 6. 30. 国土研究11) がそれである。そこでは平壤・開城・ソウルあるいは公州など、古来より都の地と目されてきた土地を再検討し、結論として、開城の地を統一朝鮮の最適地とした。ところが、先ほど引用した崔教授の辞任を伝える新聞記事では、「最近、統一後の首都は京畿道坡州郡交河面が適しているという論文を発表、注目を集めている」という一文があった。坡州郡も開城ももともと京畿道に属するので、地域的にはさしたる違いはない。おそらく、89年の論文で開城が歴代の都の中では最も新首都にふさわしいとした後、更に細かな風水的吟味を加えて場所を特定したものであろうと思われる。

新首都選定の風水的根拠もさることながら、崔教授という人物自体に関心が引かれてならない。機会を見つけ次第、会って話を伺いたいものだと願っている。

四、おわりに

以上、長々と見てきたように、現代韓国における風水地理思想は古い伝統に基づくものではあるが、次々に新たな展開相を生み出していることも明らかになったことと思う。朝鮮と云えば儒教というイメージがあるが、山岳信仰や風水説、それにシャーマニズムといった民族の血肉と化した基層文化の上に仏教や儒教が受容されたのであって、決してその逆なのではない。最後に、その一例を挙げておこう。

91年、ソウルの成均館大学には不祥事が続発した。教授暴行事件(学内での教師と学生の暴力事件)や大学財団の退陣、金貴井葬礼事件(デモ中に亡くなった女学生の葬儀を学内で行おうとした学生側と死体は「不浄」であり、儒教の聖域でもある学内には入れないとする大学との対立。結局、正門を避け、運用門から入ることで決着した)、それに入試不正事件(職員の子弟を不正に入学させ、理事らが逮捕された)などがそれである。あまりの事件続きに、大学職員のあいだに、これはきっと大学裏手の臥龍洞に伏せる龍の尾を建築工事のために断ってしまったからで、龍の怒りを鎮めるために告祀(厄払いの祭儀)をしなければならないという意見が多数を占め、儒学を建学の理念とする成均館大でそのような迷信的な行為をできないと渋っていた大学側を、とうとう押し切ってしまったという⁽³⁰⁾。

この一件などは、民俗信仰の根強さを示す好例と云えよう。

大地を流れる気脈の如く、朝鮮の風水は歴史の山脈を貫いてとどまることなく流れ続けている。その生命力は今日、些かの衰えも見せてはいないのである。

注

- (1) 『葬経』気感篇 なお、テキストは『地理大全』(台湾 武陵出版社)のものを参照した。
- (2) 図は、中野美代子著『龍の住むランドスケープ』(1991 福武書店) P.161のもの。この図は村山智順の『朝鮮の風水』(1931 朝鮮総督府) P.17の明堂図をもとにしたものであるが、こちらの方が見やすいので引用することにした。
- (3) 関心のある向きには、『朝鮮の風水』P.13~20に26項目にわたる風水用語の簡便な解説があるので、参照されたい。
- (4) 朝鮮の士大夫の住居における風水思想の関わりについては、西垣安比古「背山臨水してすまうこと——俛仰亭宋純をめぐって」(日本建築学会研究論文報告集第409号 1990. 3)を参照。
- (5) 例えば、798年のことを記す新羅初月(慶州)崇福寺碑文(『朝鮮金石総覧』上 P.120所収)は、朝鮮における風水説の流布を明確に示すものであるし、『三国遺事』の脱解王(在位57~79)の宅地争いの説話なども風水説を反映したものであろう。
- (6) 『韓国民俗総合調査報告書』墓地風水篇(1989 文化公報部)参照。
- (7) 金琪彬『韓国地名の神秘』P.117(1989 知識産業社)ただし、これらは風水からの判断ではない。
- (8) 『朝鮮の風水』P.702
- (9) 以上、四つの風水説は『水脈と風水』(P.160~164)と『韓国の明堂』(P.172)に見える。
- (10) これは「長崎の魚石」として日本にも伝わる話。原話は唐代以降、中国に流布する胡人採宝譚である。拙稿「胡人採宝譚の朝鮮的展開」(朝鮮学報 121輯)参照。
- (11) これらの他、口承文芸における風水説話については、姜中卓『韓国文学と風水説』P.127~137(1988 白文社)を参照。
- (12) これらの政治家に関する風水説は『韓国の明堂』P.186~191およびP.121に見える。

- (13) これらの他にも日帝時代の断脈行為に関する例は多い。それについては『韓国風水思想研究』P.193～197を参照。
- (14) 三浦國雄「台湾に根強い風水術」(1992. 3. 9 中国新聞)でもこれについて言及されている。
- (15) 『韓国の明堂』P.289
- (16) 『アブラカタブラ奇術の世界』前川道介 P.229 (1991 白水社)
- (17) 『水脈と風水』P.93
- (18) 同前 P.39
- (19) 『中国の風水思想』デ・ホロート P.122 (牧尾良海訳 1986 第一書房)
- (20) 崔昌祚「朝鮮後期実学者たちの風水思想」(『韓国文化』11 1991. 12) 参照 また『朝鮮の祭祀相続法』(昭和14年 朝鮮総督府)の第二章 喪 第三項 墓地制限 にも李朝時代の風水批判についての詳しい紹介がある。
- (21) 『新・韓国の風水』P.26
- (22) 『韓国の明堂』P.92～99
- (23) 同前 P.245～249
- (24) 『韓国地理総覧』池昌龍 P.265～268 (1977 明文堂)
- (25) 『東国輿地勝覧』卷十五 清州 古跡 洞檣の条
- (26) 『沢里誌』江居の条
- (27) 『朝鮮の風水』P.287
- (28) 同前 P.768
- (29) 浦山隆二 「香港上海銀行風水見分 ハイテク v s 風水」第三回全国風水研究者会議(1990. 10. 2 沖縄名護市)による。
- (30) 『高麗史節要』卷一
- (31) 『韓国の明堂』P.272 ～274
- (32) 『高麗史』卷二八 忠烈王三年七月丙申の条
- (33) 国際新聞 1989. 11. 24. (『韓国風水思想研究』P.214 より引用)
- (34) 瀬川昌久 「族譜に見る風水関連事項 香港新界の事例から」第五回全国風水研究者会議(1991. 12. 8 東京都立大学)による。
- (35) 『風水伝奇』曾子南 下集 P.97 (台湾 瑞成書局印行)
- (36) 朝鮮における風水の形局名については「巽坎妙訣」(『風水地理叢書』P.410～456 1990 影仁文化社)にある計189カ所の例が参考になる

う。

(37) 『韓国風水思想史研究』 P.215

(38) 『韓国新興宗教』 柳炳徳 P.101 (1992 円光大出版部)

(39) 朝鮮日報 92. 2. 22.

(40) 朝鮮日報 91. 9. 6.